

# 探訪 北の風景 95

## 層雲峡と二・二六事件 上川管内上川町

青木和弘

層雲峡は北海道を代表する温泉地の一つ。高さ200メートル前後の切り立った柱状節理の岩壁と、落差100メートルを超える滝の景観が有名だ。冬は「層雲峡温泉氷瀑（ひょうばくまつり）」が1月下旬から3月中旬まで開催されている。イベント会場とは異なる場所だが、自然に凍り付いた銀河の滝のダイナミックな氷瀑は見逃せない。層雲峡には黒岳ロープウェイがあり、大雪山連峰への代表的な登山口である。もう一つロープウェイのある旭岳（東川町）と、十勝岳連峰エリア（美瑛町、上富良野町）を含めて「表大雪（おもてたいせつ）」と登山家たちは呼ぶ。

日本一広い国立公園である大雪山は、上川管内と十勝管内の1市9町にまたがる。先住のアイヌ民族は、その地を「カムイ・ミンタラ」（神々の遊庭）と呼んでいた。ちなみに、「裏大雪」とか「東大雪」と呼ばれるのは十勝管内エリアで、然別湖やニペソツ山、石狩岳などがある。実は上川町の観光客数は、北海道経済部観光局の調査報告書によると、1998年の入込数が286万人（内宿泊者102万人）だったが、コロナ前の2018年は同171万人（内宿泊者60万人）と、約6割弱まで落ち込んでいる。日本経済のバブル崩壊による不況で、宴会を伴う社員旅行が激減。国民の旅行スタイルがグループの個人旅行となり、全国的にも大型の観光ホテルは軒並み苦境に陥った。

さらに1987年、「層雲峡小函（こぼこ）天城岩崩落災害」の影響があるという。崩落した岩石が石狩川と、対岸の旧国道を埋め尽くし、通行中の自動車やサイクリング中の自転車が巻き込まれて死者3人、重軽傷者6人に上った。その後、崩落の危険を避けるため、別のトンネルが掘削された。大函トンネルのある旧道は、しばらく自転車と歩行者専用道として開放されていたが、新たな崩落があつて、小函は完全に閉鎖された。層雲峡で最も魅力的な景観部分だけに、人気に陰りが生まれたという。いま上川町では「北の山岳リゾート」を目指し、町の魅力アップに取り組んでいる。かつて、層雲峡温泉の東側にある紅葉谷に、「陸軍第七師団衛戍（えいじゆ）病院層雲峡分院」があつた。1928年（昭和3年）に建てられ、戦後、旭川赤十字病院層雲峡診療所になったが、その後閉院した。既に建物は撤去され付近は駐車場



層雲峡の温泉街にある黒岳ロープウェイ乗り場。夏季は観光客や黒岳から縦走をめざす登山者が訪れ、冬季は最高のパウダースノーを求めて黒岳スキー場にスキーやスノーボードを楽しむ人々が訪れる。上川町からの登山口には愛山深温泉や大雪高原温泉、銀泉台もあるが、最も利用者が多いのが層雲峡温泉である

などに整備されている。そこに分院の開設時に建てた記念碑が残されている。郷土史家の那須敦志さんによると、その石碑には、分院開設の経緯が記され、当時、第七師団において、その後、二・二六事件に深く係わり、数奇な運命をたどった二人の軍人の名が刻まれているという。

一人は当時第七師団長だった渡辺錠太郎で、八年後の1936年（昭和11年）、陸軍教育總監（陸軍トップ3の一人）に就任していて、二・二六事件で青年将校に襲撃され殺害された。もう一人、渡辺の元で第七師団参謀長を務めた齋藤澗（りゅう）で、青年将校を支援したとして軍法会議にかけられ、禁固5年の刑を科せられた。

齋藤の長女で日本を代表する歌人になった齋藤史（ふみ）さんは、第七師団のあつた旭川の官舎



落差104メートルを勢いよく流れ落ちる銀河の滝が冬季は氷瀑となる。氷壁登りに挑戦するクライマーたちも訪れる。新緑のシーズンになると優しい緑色につつまれた穏やかな表情を見せる。夏は爽快な滝しぶきが気持ち良いが、ながれる水は驚くほど冷たい。秋は紅葉に包まれ、一番、訪れる人が多い季節である



紅葉谷に第七師団衛戍病院（えいじゆびよついでん）層雲峡分院の開院記念碑があり、設立の経緯が記されている。訪れる人は少ない

上川町に誕生した上川大雪酒造。名杜氏の川端慎治さんが担い日本酒ファンからの高い評価を受けている



で過ごし、小学校で仲の良かった同級生の中に事件で処刑された栗原安秀、一級下に坂井直がいたと記している（『おやしとわたし―二・二六事件余話』）。1980年に層雲峡を訪れ、石碑に立ち寄って、歌を残している。

おびただしき年の数すぎて事過ぎて先逝きびとの記念碑に逢う

ゆくするを誰も知らねば渡辺・齋藤の名つらねたり一つの碑の面に

殺された渡辺錠太郎の次女でノートルダム清心女子大学の理事長を務めた渡辺和子さんは、小学校3年生のとき、父が殺害される現場に居合わせ目撃するという凄惨な体験をしていた。和子さんも、この石碑を訪れている。

凍てついた氷瀑を眺めながら、二・二六事件と人々の生きざまに思いをめぐらせた。